

2024年6月

## 課題本 『ボタニカ』

朝井まかて/著

祥伝社

2022年

### ◆◆◆6月の読書会から

先月の感想文を参加者で共有するとともに、感想文の書き方について吉川先生からアドバイスがありました。・書きながら読む・書評を書いているのではないので本から離れてもよい・書くことで頭の中を整理できる、自分の考えを深める 等…。

課題本を読んで感想を書く、これが習慣になれば自分の考えを整理し自分を深める、鍛えることにもつながる。毎月の繰り返しが自分を作っていくのですね。

今月の課題本は『ボタニカ』、植物学者 牧野富太郎をとりあげた長編小説です。

(文責:森下)

### 2024年6月 竹原読書会 『ボタニカ』

吉川五百枝

沢山の花や木が出てきて、作者が正確に記述するのは大変だったろう。参考図書に挙げられているのは、論文を別にして31冊もある。

どの花にであっても「わ、きれい」と思考の部分が停止するくらいみとれるが、私には、その花の名前が覚えられない。どれも全部、「なのらぬ草」「なのらぬ木」という名前だ。

例会で、60年ほど前に出版された『牧野日本植物図鑑』の実物を見せて頂いた。この中に、植物の固定された名前や特性が集まっているのかと、今回の作品のあちこちの描写が思い返された。しかし、どれほど知の集積のなされたこの本でも、私は、黄金に光る小判を前にした猫の気分である。

今回の題名になっている「ボタニカ」とは、ラテン語起源のイタリア語で「植物学」の意味。今は、植物由来を強調したい化粧品などに「ボタニカル」と冠して使われることが多いそうだ。そして、「種」も意味する。

『ボタニカ』は、牧野富太郎の生涯を描いた作品で、NHKの朝の連ドラ『らんまん』と重ねられるという話もきいたが、あいにくこの放送は見えていない。何十年か前、教科書関連で牧野富太郎という名前の植物学者がいて、その好奇心が並大抵ではなかったというようなことだけが思い出される。というわけで、彼を知っているような、知らないような、妙な気分だった。

しかし、小説として読むのである。事前情報などはかまうことではなかった。モデルに近づけてあろうとも、この作品もテレビドラマと同様に虚構なのだ。

虚構とは言うものの、あきらかにモデルがあるとわかれば、作者もその事績を変えるわけには行かない。94歳まで植物学者として生き、『牧野日本植物図鑑』に代表されるような数々の著述、雑誌の刊行、種類ごとに学術的に記述した標本収集60万枚、蔵書4万5千冊、全

国的な植物教育の普及活動などが公表されている。

細かく事績を書きあげれば、それだけで、日本の植物学の草分け期から現在まで、多くの植物学者の仕事も網羅されるような植物学の泰斗なのだ。

調べればすぐ解るような人物を、作者が、小説にしたかったのはなぜだろうか。沢山の輝かしい事績が生まれる彼の物語の裾野を、まるで、植物学者が土の状況や隠れている根まで丁寧に、顔を近づけて写し取るが如き作者の姿勢を感じ取った。

「おまん、初めて会うのう。おまんは誰じゃ。教えようせ」さしずめ、作者は好奇心を昂ぶらせて牧野富太郎にこう尋ねて書き始めたのではないだろうか。

植物好きの彼が、いかに育ち、どんな人に会い、自己流を貫き通して〈惚れたもののために生涯を尽くす幸福を得た〉という幸福話を書きたかったわけでは無いだろう。

世間的には富太郎が、“一将功成りて万骨枯る”とも言えそうな生涯を過ごしながらか、自然(ネイチャー)の大きさを存分に語り、しかも、彼を取り巻く身内がそれぞれに、自分流の正義(理、生きる本領)に基づいて生きている様を描きたくて筆を執ったのかと思う。あの時代の秩序を批判するのは、また別の物語だ。

富太郎の身内は、病いで4歳の時父が、6歳の時母が亡くなり、7歳で祖父がなくなっている。彼が育てられたのは、祖父の後添えの妻である浪(つまり彼にとっての祖母)である。この祖母と気が合う。負けず嫌いで、指図されるのが嫌い。人も羨む大身上に、老女と弱々しい子供と二人きり。物見高いのが世間の目だが、断固とした口調で世間を退けた。世間の評判などなににするものかは。祖母の胸には「家を守る」という矜持がきっぱりと通っている。大きな傘が富太郎を形作っていく。彼の読みたい本が次々と増えても、祖母はそれを買って与えた。富太郎は、金子の心配がないまま、欲しいものは何でも入手できる。経済感覚がゼロなのだ。こういう接し方が、ずっと続くのだから、さしもの資産家も、根こそぎ売り払い、息絶え終んぬ、と言う顛末になってしまった。「国家のためや立身のための学問ではなく、学びたいから学ぶ、知りたいから知ろうとする。なんでそれではいかんのか。なんで、皆、一律に教場にすわつたらねばならんのか。」この台詞は小気味良いが、結果は退校となる。そして独学。

この「独学」が、彼の真骨頂であり、希有の才能を発揮できる。しかし、いずれにしても己を頼む「独」は、自己中心なのだ。「わし」の周りには、草木しかない。「わしは、植学の草分けになるさね。」この言葉通りの94年だったが、「わし」だけで生きられる訳がない。けれども、とにかく、富太郎の側から言えば、〈人物運がええ〉のだ。

3歳年下でいとこのお猶と結婚。祖母のメガネに叶っただけあって、富太郎の「独」をたしなめるより、むしろ擁護者であった。諦めたという状況だろうが、作者に〈さすがは土佐の女〉と言わしめる腹の据わり方だ。しかし、東京に出た富太郎は、やがて、後に所帯をもつことになる「スエ」にであう。瓜実顔の肌は抜けるように白く、涼しい目元の少女。この描写は、いかにも意味ありげだ。亡くなった祖母に代わって家をきりもりするお猶の描写が、富太郎を気鬱にさせるのとは大違いだ。作者は、別のエッセーの中で、二人の出会いを「生まれて初めての恋と呼ばずして何と呼ぼう」と書き手の心底を明らかにしている。

お猶もスエも、それぞれ富太郎のしたいことも、その偉業であることもわかっていた。普通に身上を潰すのは「呑む、打つ、買う」とよく言われるが、富太郎の「買う」費消が並大抵ではない。目に付く書物や道具は躊躇無く買うのだ。いよいよ行き詰まって大切な標本まで売ら

なければならなくなったとき、〈人物運がええ〉と言われる所以が実証される。口から先に産まれてきたような土佐人だったが、タイミング良く、人に助けられるのだ。個性と仕事内容が、大借金を解決してくれることになった。〈書物を読んで知を得、その知を深く識るために己の足で探索し、己の目と手、持てるものすべてを使って観察する〉学究の徒としての姿勢を貫いた富太郎だが、身内には迷いや惑いをもたらす“困ったさん”でもあったろう。500頁に垂んとする分厚さの中に、お猶との離婚、13回の出産をするスエ、借財逃れの転宅の苦痛など身内の泣き笑いの様子を様々に描いた。

自伝なら、本当の事を書けるのか。「記憶は、嘘をつきます。」呼び起こされるこの言葉。それが人間の本当の事なのかもしれない。事実かどうかを追いかけるのでは無く、開いた口が塞がらないような人の生き方を、猫に小判でも知ってよかった。

## 『ボタニカ』を読んで

### ◆【 T 】

「学びたいから学ぶ、知りたいから知ろうとする。」「学問は、富国や立身の道具ではない、学問は学問することそのものに意義がある。」と考え、ひたすら研究に没頭し偉業を成し遂げた牧野富太郎。才能にあふれた稀有な人物といえる。

手許にある「牧野 新植物図鑑」を繰ってみると「Makino」と名付けられた植物の多さに驚く。新種を一つ見つけるだけでも凄いことなのに…。彼の精力的で貪欲な知識欲に感心する。

学歴がないことや文献の無断借用・権威にこだわらない(教授に対する態度)などで研究室の同僚や教授とのトラブルが絶えなかったが、味方になる人たちもいて、彼の才能が認められ大学で研究を続けることができ後に理学博士の位もとることができた。それほど彼の研究が素晴らしかったと分かる。

研究に没頭するあまり人の迷惑になることをたびたびしてきたが、自分の利益のための行動、人を蹴落とすための行動ではなく、ただただ学問のためにしていることだと分っているから周りの人たちの支持や援助を得ることができた。

しかし、研究にのめり込んでの生活は問題が多くあった。まさに奇人変人であった。お金のことを考えずに研究に打ち込み借金は莫大な額になり身代をつぶしてしまったり、研究のため学問のためには家庭を顧みず、家賃の支払いは遅れ、時には、踏み倒して屋移りしたこともあった。妻の着物は継接ぎが目立ち、子供たちは哀れを催すような身なりで痩せていた。食べるものも食べずに儉約して富太郎の研究にお金を出している状況であった。

大金を借金した時、二度とも肩代わりして助けてくれる人が表れた。植物と会話しながら、ただ一筋に研究している彼の人柄に惹かれるものもあり、彼の研究は国の宝だと認めたのだろう。

妻の猶との関係は、始めは理解しがたいものであった。当時の社会状況では妻以外の女性がいるのは不思議ではないが、富太郎の振る舞いはあまりにも身勝手だと思った。しかし、読み進めていくうちに猶にとって、もちろん共に暮らす夫婦の形が一番望ましいが、身代

をつぶしても彼を支援することが彼女の愛の形だったように思える。

スエはどうだろうか？ 貧しい生活の中、やりくりしてはお金をつくり彼の研究を支えてきた。彼女自身は商才があるようで自立できたであろうが、そうはしなかった。自分は贅沢をしないで彼を支えることが彼女の幸せであったのであろう。

富太郎の業績は素晴らしいものであるが、彼女たちの支援のもとに、また、自身では犠牲とは思っていないだろうが、彼女たちの犠牲の上に成り立っていたのだと思う。

## ◆ 【 N2 】

表紙の銅版画の人物の鼻は幹か根のようで、後ろ首から蔓と葉っぱが生え下がっています。なにか物語の面白い予感がしてきます。読みながら書き留めた植物の名は 194、書き留め忘れた物もあるので、この本一冊に載った植物の数はもっとあるのでしょう。富太郎が名付けた植物はざっと 2500 以上と言うのですから、これはほんの少しなのですが、初めて聞く名前の植物もありとても楽しい本でした。

娘婿の額賀の言うとおりの「お義父さんに社会的な常識や実務能力を求めるなんて、土台が無理なんですよ」「本物の奇人変人は自覚がありませんからね」の言葉のままの富太郎です。周りの人を巻き込み迷惑をかけたとも思わずに、自分の思うままに生きたから、自身の研究を完成させあの立派な「牧野日本植物図鑑」を出版できたのでしょう。

確かに立派な仕事を完成させたのですが、私には、破産の片付けをした猶と番頭の和之助のその後も気にかかります。佐川を去って二十年以上経っても細々と富太郎一家を、経済的にも影で支えていたようで、猶さん立派！と言いたいのですが、猶と暮らす和之助はどんな気持ちで日々を過ごしていたのでしょうか。大店の番頭になったということは一生涯ここで務めようと思っていたでしょうに、破産後も昔の主人にここまで尽くすとは和之助さん立派！と思いつつも少し気の毒に思います。しかし結局はそれほど富太郎には人を惹きつける魅力があったという事なのでしょう。

実在の人物が題材になっていると、書かれたことが真実とつい思ってしまいましたが、「え！！これってほんとうなんですか？ 書いてあるだけで本当にあったかどうかは解らないですよ。」と教えて頂いて、「そうね、小説ですものね」と改めて思いました。

## ◆ 【 KH 】

生命誌研究者 中村桂子さんに続いて、日本を代表する植物博士 牧野富太郎さんの生涯を綴った小説。なんとも素晴らしいラインアップ。今だに、生命誌をひきずっている私としては、“植物相”“植物誌”の文字には、すぐさま反応してしまう。植物誌、日本の植物のフローラを、あまねく解き明かしたいという牧野さんの 狂の文字が付きかねない情熱は、凄い。

こと植物のこととなると、寝食も忘れ、体裁も、人の事もどうでもよく、お金にも無頓着。その猛烈ぶりは、自己中と、途中で読みたくなかったという批判的感想をネットでちらりと見つけ

たものの、私としては、度を越しすぎてもはや痛快。笑ってしまう(他人事だからね。。こんな人が、身内というか家族にいたらそりゃ、とんでもないけれど)

稀代の植物好きは、もちろんだけれど、作中に何度かでてくる通り、富太郎さんは、そもそも稀有の知りたがり。それは多分、“ひと”が持っている原初的な欲求なのだと思う。そして知ったこと、自分が発見したことは、誰かに伝えたい、愛しい植物たちのことをちゃんと記して残したい。そういう気持ちのととても強い人だったのだろう。真理を明らかにしたいという純粋な探究心の塊だった。小学校で子どもたちに算数の授業をしながら、語られる場面は実は私がつっても感動した場面だ。

『発見～その感触を忘れてくれるなと願いながら教場を見回した』(p44 15行)

『真理、真実は誰かに授けてもらったり、教えてもらうことで捕まえられない。そう、教えること、すなわち一方的に伝えることではない。自らで何かに辿り着く瞬間を辛抱強く待つことでもある。』(p45 2から3行)

p178にも、わしは人に教えることが無類に好きなようじゃと、内心で苦笑した。とある。

植物の様相、生態をあまねく知りたい。そして知ったことは人に伝えたい、そのために一生をかけた人だった。彼には、名誉欲をはじめとする私利私欲が微塵もない。そこが彼の魅力だし、清々しさを感じる。それ故に、彼を支えたいと、これまた奇抜な人を呼び寄せる。おばあさまも、なおも、スエさんも、池永さんも。。皆、日本中の植物相を明らかにしたいという、富太郎の熱、志に惚れ込み巻き込まれた。(結果えらい目にあった)

富太郎さん自身が、人は誰と出会うかじゃ と作中でつぶやいている。そう、誰と出会うか。何と出会うか。“縁”の字がまたまた浮かんでくる。

両親を早くに亡くした、大切な跡取り孫と、養女に迎えたなおさんを一緒にすれば、牧野の家は廃れることなく続いて行くと、おばあさまは目論んだのかもしれないが、そうは問屋がおろさなかった。心の何処かで、何が何でも家を守るとか、財産を守るとかそういうことから一歩引いて、繋ぎとめることなど出来ぬ富太郎の人となりをつつと、一番認めていたのが、おばあさまではないか。酒屋が傾いた理由も諸説あり、本当のところはわからない。皆さんがなおさんに同情し、富太郎は許せんやつだとおっしゃっているのを聞きながら、全くその通りだけれど、おばあさまも、なおさんも、すえさんも最後は、「どういうてみたところで富太郎さんは、思うように自分の一生を生き切る、そういうお人じゃ」と思っていたに違いない。

血縁には恵まれない幼少期、彼が家庭を顧みない、金銭感覚も欠落しているのは、生育歴が影響しているかもねえ、、という、吉川先生のご指摘、確かにそれは大きいかもしれない。となると、私生活、金銭感覚的には、とんでも無い奴！とばかり責められないような気もしてくる。そういえば、以前訪れた川端康成文学館(茨木市)。康成さんは、2歳で父を、3歳で母を、さらに14歳で祖父を無くし、天涯孤独となったことを知り、その事が、かの文豪に与えた影響はいか程のものだったのか、彼の生涯の閉じ方を合わせて思い巡らせたことを思い出した。

最後に、昭和天皇との会話

終戦3年後、皇居に再び広がりつつある武蔵野の植生を眺めながら、陛下『本来が、戻るか』  
『～正確には、戻るともうしますよりも巡るのです。自然も生命の集合体でありますから、決して元には戻れません。巡りながら遷移し、次の世代へと進みます』この富太郎さんの言葉は、

まさに生命誌、生き物の本質を言い得た表現だし、まさに動的平衡だと。感じ入った次第。

### ◆【 K子 】

菩多尼訶経＝ボタニカ(羅語起源)＝植物学と言う意味だそうです。主人公は「牧野富太郎」実在の人物、かの有名な植物学者です。彼の命名は2500種以上、新種発見も600種余り、でもでも偉大さと引き替え(?)には、あまりにも破天荒。この所行罷り通ったのも彼のもって生まれた性格、裕福な家の育ち、彼を生涯に渡り支え続けてくれた女性のお陰も多いと思います。

祖母浪子(77歳で死去)富太郎とは血縁関係ナシ。後妻に入った「岸屋」という屋号のある商家(雑貨業)酒造業の大家を切り盛りして富太郎を蝶よ花よと育てます。(男子には使用不向き?)富太郎は、頭脳明晰な少年でした。(とても個性的＝変人の要素あり)

先妻、猶(富太郎の2歳下の従妹)彼女は本家岸屋の若女将となり富太郎のどんな…願いでも叶え岸屋の倒産(富太郎の金銭感覚のなさ、放蕩)事後処理まで行い、その後も富太郎一家の支えになるのです。

後妻小澤壽衛(14歳菓子屋の看板娘、富太郎に一目ぼれされる…)13人の子どもを産み7人(3男4女)成長、明けても暮れても金の算段に追われるがあまり苦にもする様子も見せず生涯富太郎を支え続ける。55歳の若さで死亡。貧乏の代償とすればあまりにも大きすぎるのでは…。

3人の女性の支えがあつてこそその奇人、変人とまで言われた富太郎の学者としての生涯(94歳没)があつたのではないのでしょうか。作者の朝井まかてさんは、富太郎の植物に対する熱量・研究心・学者としての生き様を克明に描いています。(本の厚さがメタボです)私はこの学問を大成させた3人の女性の矜持に喝采を送ります。勿論拍手も……。

### ◆【 望月悦子 】

時代小説かなと思ひながら、植物に疎い自分にとって題名の「ボタニカ」「はてこれは何？」で読み始めた。

文中「菩多尼訶経」の著者堀見久庵(医者)が、富太郎が17歳のころボタニカは羅語(ラテン語)が起源で「植物学」を指すことを教えてくれた人と記述。成程的確な題名だと思った。

自分はいつも成育歴をベースに読み込んでいく習性があるが、今回も富太郎の一生を理解するためにも、成育歴が大きく関係しているように思えた。ただ、江戸末期から明治の時代背景も伏線的に絡み合いながら、本人は満足のいく人生を全うできたのではないかと思える。

血の繋がらない愛情深い祖母の養育と商人でありながら名字帯刀を許された裕福な家庭

に育ったことが、彼の人間形成をつくり上げる基本的人格が育てられたのではないか。

用意された資料に「植物をもっと知りたいと、小学校も2年足らずでやめ、筆と帳面をもって野山をめぐり、書をめくる。独学でどんどん進んでいく」とある。家族間の愛情、経済的バックボーンの上に知的才能まで備わっている。興味のあるものには徹底的に納得いくまでかかわる資質も育てられたようだ。幼少期からお金に困ったことのない生活から「金のことで頭を悩ますなんぞ、馬鹿馬鹿しい」という性格。そのためにはどれほどの家族の涙ぐましい大きな犠牲による支援が多かったことかと察する。

3人の女性、血の繋がらない祖母、家を守るために形式的に結婚した従妹、事実婚である最愛の妻たちの存在無くして天才的植物学者は96才まで生き延びることができたであろうか。3人の共通点は富太郎の才能に誇りと尊厳をもって支え、寄り添うことにあつたように思える。一番損な役割をしたのは従妹と番頭の息子ではないかという話題もあつたけれど、「屋号」や「主」を守ることが至上の喜びであり責任を伴った時代にあつては、彼らの生き方も当時の価値観からすると、至極もつともなことなのではないかと。また、最愛の妻は「自分のことを不幸だなんて一度たりとも思つたことはないような気がします。貧乏は貧乏ですが恥ずかしい貧乏ではない。道楽息子を一人余分に抱えているようなものだといつて笑いよりました。おすえさんは江戸前の女でした。誇りをもってあなたを支えたがです」という江戸っ子気質・心意気をもって富太郎を支え55歳で生涯を閉じている。彼女もまた苦労は多かっただろうけれど満たされた人生だつたのではないかとさえ思える。

また富太郎は、人生の節目節目に大事な人や社会情勢に巡り会いながら成長していったのだと思う。一人目は、外の世界を知ろうと17歳で現在の高知市へ行き、高知中学校の教員永沼小一郎に出合い、新しい科学としての植物学を教えられている。二つ目は、植物だけではなく気になること・興味をもつたことには徹底してかかわる性分のようで、明治初期の社会運動に傾倒した時も没頭してしまうがこれはおかしいと思うと、流されないで、本来の自分の考えに戻るといふ信念もあるようだ。「今の政府の力があつてこそ、あれほどの博覧会が国の事業として開けたのだ。そこまで考えると、世が変わつても博物学や植学の道を貫いてきた人らの、なんと強靱なことか」と植物学への進むべき道を確立している。面白いと思つたのは、政治家の権力争い、自由党内の内輪揉めを風刺して魑魅魍魎(人に害を与える化け物の総称。また、私欲のために悪たくみをする者のたとえ)ののぼり旗まで作つて反論していること。その他多彩な能力があつて天性の描画力にも恵まれている。また実家が破綻したため、郷里に帰省した時地元の植物の研究をしながら、西洋音楽の演奏会を開いて指揮者になつて指揮棒を振つたり、「日本植物志図鑑」の刊行を自費で始めたときには、印刷工場に出向いて石板印刷技術を学び、絵は自分で描いて刊行している。必要だと思えば専門職人にも劣らない技術を磨いている。メンバーの一人が分厚い図鑑をこの会に持参してくれ見せてもらったが、実に立派なものだつた。

3人目は、東アジア植物研究の第一人者であるロシア帝国のカール・ヨハン・マキシモヴィッチとも交流を語り、富太郎が作成した植物図を絶賛する返事をもらっている。なによりも大きな自信になつたことだろうと思える。大学内の人間関係に悩みロシアに留学することを考えて準備している時、博士が亡くなり留学を断念している。あの時留学していたら、富太郎の人生も変わっていたかもしれない。人間の運命なんて動的平衡の冴えたるものだと思つた。

4人目は、日本初の理学博士伊藤圭介(幕末から明治期の本草学者・蘭学者・博物学者・医学者)からは「テーブルボタニーになってはいかん。野山を歩き、日本人の手で日本のフロアを明らかにすべし」と研究姿勢を示されている。まさに富太郎が幼少期から好きでやっていた植物とのかかわり方そのもので、生涯この研究姿勢が貫かれて10万点に上る植物標本が完成されている。伊藤博士は因みに「雄しべ」「雌しべ」「花粉」という言葉を作った事でも知られている。富太郎の「日本植物名彙」も日本人の手になる最初の日本植物総覧である。

5人目は、借金返済のために植物標本を手放さねばならなくなった時の新聞の見出しも面白い。その見出しは「不遇の学者牧野氏植物標本10万点を売らん一生命を賭して収集した珍品を手放さねばならない学者の心事」とある。この記事に反応したのが、久原財団房之介・鉦山王日立製作所を設立した実業家と京都帝大の法科の学生池永孟、彼は養父が大変な資産家で標本を買い取らせてもらって、牧野先生に寄贈すると申し出ている。その真意は「貴重な標本が海外に流出したとあっては国家の損失、文明国の恥それを防いで牧野先生に研究を続けていただきたい。我がものにしたいわけではない」明治初期の篤志家の心意気を見るようで、人が人を呼ぶとはこういうことなのかと思った。

幼少期から「好きなこと」を貫ける人生で、思い込んだらこれまた一途に貫き、裏表のない誠実さを貫き、人にへつらうこともなく必要な出会いでは猪突猛進で交流を深め、可愛がられ、大事にされた人生であったように思える。

読み終えて、自分は平凡な人生でよかったと思えた。

## ◆【MM】

興味があるものにはとことんのめり込み、小学校中退でありながらも植物学者として名をあげた牧野富太郎。植物の収集・分類の調査研究に没頭した挙句、実家の財産を使い果たして廃業まで追い込む。こんな人が身内にいたらたまらんなぁと思いながら読んだ。

課題本が小説であるとき、登場人物を思いながら「普通ってなんだろう」と思うことが多い。普通にできることからかけ離れているから主人公となりうるのか。今回の主人公は実在の人物なのでその人の業績と私生活のだらしなさのギャップがありすぎて「ちょっと、この先どうなるの」という気持ちで最後までページをすすめた。実際にあったことは年代に即しているので小説であるということ忘れて感情移入した。実在の人物が主人公で、ある程度その人のことが頭に入っている場合、その人の私生活を実際に覗いているような気分にもなる。

富太郎が許婚 猶とうまくやっていたら…帝国大学に職員として入れたのだからそこでのルールを空気を読んでうまく立ち回ることができていたら…とストーリー通りではなかったら…と考えてみると、凡庸でドラマチックな主人公にはなりづらい。こんな主人公だと学者としては大成しないだろうなぁと苦笑する。でも私が思うのは研究と女性、どちらか一つ、研究だけに絞れなかったか…とは思う。

とにかく自分に素直な人だったと思う。興味があるから研究する。それはいいとして、惹かれたからって妻帯者が新たな家庭を作るか?! だらしない。女性に対してもお金に対しても。

人間だし仕方ないよね、という域を超えている。それでも富太郎に関わった人は彼を助ける。これでどうとう立ちいかなくなるのか、という時でも支援者が現れたり運もある。魅力がある人なのだろう、そして彼が果たしたいことを語る時なんてエネルギーにもあふれ私ができることであれば、と思わせる人なのだろう。

今月の読書会での一番の収穫は富太郎監修の植物図鑑が見られたことだ。少し見ただけでもわくわくした。彼が見つけた植物、彼の名前がついた植物、『ボタニカ』にも出てきた草の名前を探したり。重い図鑑を持参してくださった参加者に感謝です。古い資料が持つ価値は十分にある、と再確認した。